

椎名麟三全集

6

椎名麟三全集

6

小説
6

冬樹社

椎名麟三全集 6

昭和四十六年五月一日初版第一刷発行

著 者——椎名麟三

発行者——高橋直良

発行所——冬樹社 東京都千代田区神田神保町二一一八

電話東京二六四—〇三四六 振替東京七七五七

印刷所——三容堂印刷株式会社

製本所——重製本株式会社

装幀者——栃折久美子

写 真——田沼武能

定 価——一〇〇〇円

© Rinzo Shina 1971

0391-02006-5190

第六卷目次

片隅の人生	3
愛の証言	23
母の像	203
神の道化師	219
美しい女	267
半悪魔	471
役僧	499
運河	517
最後の人	651
解説	683
小田切秀雄	

解

題

.....

695

小説
6

片隅の人生

1

田中春吉は、〇町の狭い三畳の間借先から、京王線の踏切りを越えて、I町にある和泉ガラスへ通っていた。この三年来の彼の人生体験は、下宿先から工場までのこの十分ほどの距離のなかにとじこめられていた。だが、この農村から出て来たばかりの二十五の青年は、それに十分満足していて、どこか遠いところへ行つて見たいなどという考えなど思いうかべたこともなかったのである。

その道筋は道筋の方で、こんな春吉にこたえて、彼に豊かすぎる体験を与えた。夕方のマーケットには、このあたりのあらゆる階層の主婦たちが、貧しいひとも豪華な合オーバーを着込んでいるひとも、同じように買物かごをぶら下げ、それが女としての当然の運命であるかのように、十数軒の店先へひしめき合っていた。ちゃんとパチンコ屋も二軒あり、自分の葬式をとり行っているような神妙な顔でパチンコを弾いている姿もずらりと見られたし、穴に入って下剤をかけられたようにどつと玉の出るチーンジャラジャラという、

喜ばしげな、しかし悲しげな音も、聞くことも出来た。また、百円札をひろったのも、この道の上であったし、赤い鼻緒のまだ新しい女の下駄が、溝にかかった橋のたもとにひっくりかえっていて、深夜に起ったひとりの女の悲劇を想像させたのも、この道の上であった。彼は、工場の四人の仲間に、この片足の下駄の話をして、人々とともに結構午前中、楽しむことが出来たのである。

だが、この道筋は、春吉に秘密な楽しみも与えていた。それは一間間口のやきとり屋の前を通るといふことだった。夜業でおそくなったりすると、若い女の笑い声が入口のガラス戸越しに聞えて来たり、かすかに開いた戸の隙間から、その店を経営しているという姉と妹の顔も見ることが出来た。だが酒の飲めない春吉は、その店へ入って見ることは出来なかった。ただ、朝、その店の前を通るときは、まだしまっている、と思った。夕方、やきとりと筆太に書いた赤い長い提灯が、軒下にさがっているのを見ると、提灯がさがっている、と思った。その提灯に灯が入っていると、提灯に灯が入っている、と思うだけだった。しかしそれだけで、情なくも、彼の心はある未知の楽しい予感に、ふくらんで来るのだった。そして彼は、半年近くも同じ眩きをつづけていたのである。

「今度給料をもらったら、必ずあの店へ行ってみよう、今度こそ間ちがいなく行くこう」

だが、春吉は、給料日になると、工場の近くに住んでいる綾子という少女から、金を借りられてしまうのである。この習慣は、一年以上も続いている強固なもので、給料日なのに綾子が姿をあらわさない、春吉の方から持って行かずに居られないほどのあわれな状態になっていた。綾子の父は、どこかの会社の課長をしており、綾子は、新制高校へ通っていたが、春吉は、その綾子のおかげで、女というものは実にいろんなものが必要なのだ、ということを学んだのである。綾子は、近所のよしみで、工場主の和泉三郎の家へよく遊びに来る。そして井戸のある狭い裏庭をへだてているだけの工場へやって来て、春吉を呼び出すと、まる

で彼と特別な関係でもあるような親密さで、あまえるように、こういうのだ。

「春さん、お金三千円ほど貸してえ。靴、買いたいの」

すると春吉は、ひどく悲しげな気持になりながらもこう答えずには居られないのだ。

「ああ、いいとも。でも給料日まで待ってくれな」

ところが靴だけではすまないのである。綾子は、化粧品や服やオーバーやカメラや首飾りや旅行などを次から次へと、訴えて来るのだった。そして情ないことに、春吉は、その綾子の訴えに応ぜられずには居られなかったのである。夜、彼は、白い、しかしぶくぶくむくんだような綾子の顔を思いうかべながら、自分是一体、みんなのいうようにあの女に惚れているのだろうか、と考えるときが多々あった。するとたしかに自分は、その綾子に惚れている気がしたが、しかしまた、本当には惚れていない気もするのだった。だから数日前、綾子が大学生らしい男と親しそうに歩いているのに出会って、綾子が学生と関係があるという噂が真実であることを知ったとき、春吉は、思わずこう呟くことが出来たのだった。

「やれ、やれ、やっとなこれですんだんだ」

しかし彼に嬉しいような淋しいような気がしていたということも事実である。

だが、すまなかつたのは、春吉の周囲だった。工場主の妻は、月に何度か、ヒステリイを起して、夫へ今度こそ別れると泣き叫ぶような女だったが、この綾子の事実を知ると、自分のことのように憤慨した。

「綾子さんも綾子さんだけど、春さん、あんたもだらしがないじゃないの。しっかりおしよ、ほんとに」

春吉は、自分は全くだらしがない人間である、と思った。工場の仲間のうち、二人の見習いの少年は、だまって春吉を見ていただけだったが、四十男の源次は、春吉へ笑いながらいった。

「春さんは、あまいなあ」

春吉は、たしかに自分はあまい人間である、と思った。

「しかしあの綾子という女、小娘のくせにひどいやつじゃないか、がんと一丁行ってやれよ、近所のやつだって構うもんかよ」

春吉は、自分は女からだまされて腹を立てている不幸な男なのだ、と思った。

だが、春吉の生活は、一向変らなかつた。彼は、人々のいう通り、悲しみもし、腹も立てていたが、ほんとうは、綾子なんかどうでもよかったからである。彼は、朝、朝、しまっているやきとり屋の前を通りながら考えるのだった。

「まだ、しまつてゐるな」

2

ふだんの綾子の行動は、とかく近所の人々の眼をひくものであっただけに、春吉の不幸は、忽ち工場のまわりに知れわたつて、春吉自身とは無関係に、確固としたものになつて行つた。ふだんあまり口を利いたことのない建築技師の若い妻が、やさしい微笑をうかべながら春吉へいった。

「お早うございます」

工場主の家と隣り合せている土地ブローカーの老母が、どういうわけか、工場へふかした芋をざるに入れてもつて来てくれた。で春吉は、お悔みを受けた家人のような神妙な顔で、それを受取つた。

「どうも、わざわざ、ありがとうございます」

春吉の不幸は、さらに杉並のあたりまでとんで行つた。というのは、工場主の妻の知合であるという三十

すぎの女が、春吉を訪れて来たからである。飯田というその女は、洋裁師であるということだったが、白哲という言葉がふさわしい上品な顔をしていて、あたたかそうな卵色のハーフコートを着、高価そうなハイヒールをはいていた。乾燥室からとり出した製品を整理していた春吉は、工場主の妻と呼ばれて、工場主の家の縁側に行った。飯田という女は、踏み石の上にハイヒールの足を形よくおいて腰を下していた。彼女は、春吉を見ると、にこにこしながらいった。

「和泉さんのおくさんからお聞きして、エデン教へお入りになるように、おすすめに来ましたのよ」と彼女はいった。「ほんとにお苦しみでしょう。でも相手の女の方をうらんではいけませんわ。エデン教へお入りになれば、かえってその女の方の仕打ちが、ありがたいと思えるようになるですよ」

それから飯田というその上品な女は、薬の効能書のようにその宗教の効能をのべ立てはじめた。やはり春吉のように女に裏切られて自殺しようとした男の救われたことや、不治の病がその宗教のおかげでなおったことなどである。工場主の妻は、お茶にかこつけて、その話から体よく逃げてしまった。しかし女は、別にいやな顔もせず、また春吉の人信を無理じいする様子も見えなかった。彼女はいった。

「こんなお話はしますけど、あたしがすすめるからといって、このお教えにお入りにならないでね。信仰というものは、御自分でその方へお心が動いて行く風でなければなりませんのよ」

すると春吉は、自分の不幸はほんとうの不幸だったのだ、自分はもう救われようのないほんとうの不幸な男だったのだという気がして来た。綾子との事はとび越えて、ふだんはあまり気にかけたことのない自分の兎口であるという事実や、給料が一万円にみたないことや、埼玉で百姓をしている自分の両親の貧しさや、この間落して割ったガラスの弁償のまだすんでいないことなどが思い出されて来たのだった。女は、考えにすんでいる春吉を見ると、気の毒そうにいった。

「ほんとにわたし、ここへ来てよかったと思いますわ」

そして女は、美しいパンフレットを一冊おいて帰って行った。二、三日たって、その飯田という女は、ふたたびやって来て、パンフレットを読んだかどうかたずねた。まだだ、と答えると、彼女は失望した様子も見せなかった。しかし帰りにこの間と同じような言葉を繰り返した。

「御自分で神様をお求めになるようにならないと駄目なのよ。このお教えの神様は、きっとあなたをいまの御不幸から救って下さるんですから」

春吉は、相談相手になる源次にどうしたらいいかたずねた。横に幅のあるがに股の源次は、宗教のことになると一向不案内だった。源次は、法華だった自分の祖母を思い出したきりだった。そして思案した揚句、こういった。

「そのエデン教というのも、やはり太鼓たたくのかなあ」

飯田という女は、全く熱心な女だった。春吉を三度たずねて来たのである。しかも今度は、自分はそんな神様なんか信じられないといっている工場主の妻までが、飯田という女へ加勢していった。

「春さん、エデン教へお入んなさいよ。あんな綾子さんみたいな女、すぐ忘れられるわよ」

春吉は、綾子のことなど自分に大した問題になっていなかったが、もう仕方ない気がした。彼は、丁寧に頭を下げていった。

「それではよろしくお願いします」

すると、春吉の胸のなかに、怒りに似た何かかたいものが、ぐっと頭を持ち上げて来たのを感じた。だが女は、素直な喜びを見せて、百円の入会費も自分が立て替えておくといいつて帰った。春吉は、工場主の妻に、千円の前借を申込んだ。そして工場へかえると源次へあわれな声でいった。

「源さん、おれ、あのエデン教の信者になったよ」

源次は、頓狂な顔になって、春吉へ何かいおうとしたが、春吉は、その源次の様子に、大変なことを仕出かしたのだということを改めて思い知らされた。彼は、もう何をする気にもなれず、乾燥室ではぜてとんだにかわを入れる罐へ腰を下した。罐の蓋は、ペコンと情ない音を立てた。十坪あまりの小さな工場は、窓が二つきりしかないので、うす暗く、煮えているにかわの鼻のつまるような動物臭が、むっと立ちこめていた。一方の窓際に、大きな仕事台へ向い合つて、板ガラスへにかわを塗っている二人の見習工の少年は、いまの源次との会話を聞いたらしく、何かひどい災難に出会ったひとを見るような眼で、春吉を盗むように見ながら押しだまっていた。源次も、まるで春吉が死病にでもかかったような遠慮と当惑を見せながら、にかわの塗られたガラスを次々と、乾燥室へ運んでいた。春吉は、入口の方を見た。工場主の家の縁側が、庭ごしに見え、その日向で、工場主の今年生れた赤ん坊の守りをしてる姿が見えていた。やがてその工場主は、奥の方へ消えたと思うと、曲げた口の端に煙草をはさんで、勝手元からのこの工場の方へやって来ると、いつもの不機嫌な声でいった。

「春さん、明日までに、矢野建材へ三百枚出荷出来るだろうな」

春吉は、仕方なく罐から腰を上げながら、はじめて、工場主へ口答えるようにいった。

「とても出来ませんよ、明日まで三百枚なんて」

工場主の色のわるい唇の端が、かすかにふるえ、暗い眼が、春吉を見えるように見た。

「春さん、お前、女にふられてから、急にえらい男になったな」と工場主は皮肉にいった。

春吉は、工場主の傍から去ると、第二乾燥室の方の戸をあけた。外の空気にふれて、ガラスから弾ぜ残っていたにかわが、一斉にピシピシと音を立ててあたりへとんだ。春吉は、工場を出て行くやせて背の高い工

場主の後姿をちらっと見た。春吉は、自分は、もうひとりぼっちなのだという気がした。すると彼は、もうどうしても、あのやきとり屋の妹を好きになってやろう、でなければ、自分の身がもてないような気がして来たのだった。

春吉は、その夜、はじめてその大和屋というやきとり屋へ行った。四、五人の客がいて、せまい店は、それで一杯だった。姉の克子は、ひどく勝気そうで、酔っぱらった日雇労働者風の老人を体よくあしらっていた。春吉は、自分の好きにならなければならない妹の安子を見た。彼女は、何とかいって、すぐ客の背をたたいていた。その馬鹿の一つ覚えのようなサービス振りのなかには、案外悪ずれしていない十九の女の心が感じられた。勿論、春吉も彼女から背をたたかれた。春吉が振り向くと、彼女は、暗誦でもしているような声で、とがめるようにいったのだった。

「あんた、どうしたの？」

春吉は、侮辱された気がして、そんな安子が不満な気もしたが、仕方もない気がした。彼は、媚びるようにいった。

「この酒、少しすけてくれよ、おれ、あんまり飲めないんだ」

安子は、素直にコップをもつて来た。春吉は、自分のコップの酒を殆んどそれへ移した。安子は、げげんな顔をして春吉を見たが、あふるように一気に飲んでしまった。春吉は、安子の豊かに肉づいてくびれさえ出来ている白い柔い咽喉が、一口飲むたびにゆるやかな痙攣でも起しているように動くのを見た。安子が、コップをテーブルへおくと、春吉は思わず深い溜息をついていた。同時に計画通り自分が安子を好きになっているのも感じていた。

春吉は、工場へつとめるのと同じ几帳面さで、大和屋へ毎日通った。百円あればやきとり五本にコップ一杯のめるといふことがわかったからである。だが、安子と馴染むことが出来、親しい口も利けるようになるにつれて、姉の克子と、台所で働いている彼女たちの母たつが、それぞれの意味で、彼に苦痛を感じさせるようになって来たのである。

姉の克子は、春吉より一つ二つ年上のようだった。がっしりした身体をしていて、計算もたしかだった。春吉は、幾度も克子に気に入られようとしたが、克子は、ちゃんと一定の距離をたもっていて、自分の方から冗談をいかけたことはなかった。彼女が、カウンターのかげにかがんで何かしているとき、彼女の頭の上から話しかけると、なぐられでもするように頭を横に避け、じろりと警戒するように眼の隅で見上げた。朗らかに笑ったことなど見かけもしなかった。たとえ彼女が笑っているときも、何か冷たい緊張が感じられた。春吉は、克子から見られると、安子と笑い話をしているときでも、身がこわばってしまふのだった。

克子は、ときどき店をあけた。妻もあり、子供が五人もいるという運転手と会うためである。彼女は、この運転手へ相当毎月みついであるようだったが、妹の安子も母のたつも、少しも不平をいうことが出来ないようだった。克子は、いわば神のようにこの店を支配していたのである。

だから安子は、姉の克子が店にいないときは、鎖をはなれた犬のように生々と動いた。克子は、安子がどんな振舞いしようが勝手にさせておくといたところが見られるにもかかわらずそうであった。母のたつも、ふだんは、台所へと同じ込められているのだが、克子がいないと店へ顔をあらわした。その顔は、どこか

陰悪なかげがあり、過去の荒んだ生活が、やせた身体全体に感じられて、刑務所へも行ったことがあるという噂は、ほんとらしかった。ひどい酒のみで、酔うと乱暴を働いた。安子は、その母親を半ば諦め、半ば軽蔑している風だったが、克子は、全く無視していた。そして事実、たつは、克子が店にいたときは、一滴の酒も口に出来ず、死人のような顔で、酒の爛をしたり、簡単な小料理をつくっていたのである。春吉は、このたつからも、挨拶の言葉ひとつ聞いたことはなかった。彼女は、克子が店にいないくて、客から乞食のように酒をもらっているときでも、春吉の顔を見ると、奥へすっと消えた。春吉は、克子もいつも見られているようで恐しかったが、このたつも恐しかった。怒ったら、人殺しでもしかねない感じがしたからである。

春吉は、エデン教のいやな神から逃れようとして、別の神に出会った感じがした。春吉にとっては、克子は勿論、この死人のようなたつも、恐しい神に見えるからだ。だから春吉は、滑稽にも、安子と口を利くときは、犯罪でもおかすときのように、克子やたつの動勢に眼を見張っていなければならないのだった。その彼は、工場で働いていても独言をいうようになり、道を歩いていても思わず声に出してこう呟いているのだった。

「おれは、ほんとうに生きてるんだろうか」

すると彼の心のなかで、生きていることはたしかだが、しかしほんとうには生きているのではない、という声がするのだった。

ある夜だった。夜業でおそくなつたが、春吉は、小学校の模範生のように、やはりちゃんと大和屋へ出かけた。金もなく、口説も知らない田舎者の春吉は、一日も欠かさないという行為で、彼女へ愛を告白するより仕方がなかったからである。だが、残念なことに、安子は彼の行為に愛の告白を感じるかわりに、倦怠を感じて来たようだった。彼は、そんな安子に憂鬱になりながらも、この行為をつづけて行くより仕方がない